

E-15 家庭経営学領域の研究における統計的仮説・検定法利用について

昭和女大短大 ○天野寛子 都立立川短大 伊藤セツ 大竹美登利
法政大大学院 森ます美

目的 家庭経営学領域の研究においても、隣接諸領域のそれと同じく、個々の研究者の依拠する研究方法の相違により、あいまいないくつかの季語がみられることはいうまでもない。われわれは、今日の家庭経営学研究の中でもかなりのウエイトを占める「調査」研究において、特に、統計的仮説・検定法利用が一般化していき、現状に注目し、この統計的手法の持つ本来の意味、他隣接領域での利用状況、家庭経営学領域への導入のされ方、そこではたしてこの手法の客観的役割、問題点を明らかにすることを目指す。

方法 第1に、家庭経営学領域の研究における統計的仮説・検定法利用の現状を示し、第2に、この手法の発生の背景・由来・季語、この方法とめぐる論争の歴史をのべることによって、この方法の持つ意義と限界を明らかにする。第3に、家庭経営学の隣接領域でのこの方法利用の姿態によれ、第4に、家庭経営学領域に、どのような媒介を経て導入されたかを調査し、第5に、その結果、この領域の研究にそれがいかに影響を及ぼしたかを具体的事例にもとって検討する。

結果 今日、家庭経営学領域の「調査」研究は、本来は圃場試験や実験室での管束された実験に適用されてきた統計的仮説・検定法を、心理学を媒介として導入し、統計学看聞でこの方法をめぐる展開されていき論争とは無関係に、この方法にいけば無批判に依拠して結論を導き出していき傾向がみられる。われわれが具体的事例で示すとおり、この方法の無批判・無差別な適用は、家庭経営学領域の研究の固有な発展にとって、今日ばかり、マイナスの影響を及ぼしていきことが明らかとなった。